

嶋満神社便り

平成二十八年十一月号(第二十一号)
発行 嶋満神社奉賛会

本年度の例祭無事終了

去る八月二十一日(日)、当嶋満神社の例祭が、恒例「浮島の夏祭り」とともに行われ、吉坂の岩室稲荷社、森本宮司様の手により厳かに執り行われ、無事終了いたしました。当日は沢山の奉賛会員様の参列とお供えを頂き、ありがとうございます。

厳しい残暑の真っ最中ではありませんでしたが、鬱蒼とした古木に囲まれた山上は涼しい風が吹き抜け、まさに古文書にある「吹戸の御碕、浮島」を体現することができたようでした。

※吹戸(ふきど、または気吹戸：いぶきど)：神が息を吹きかけて穢れを禳う神聖な出入口。

今年に参加団体のくじ引きがなく、お参りの方々も若干少なめではありましたが、浴衣姿の子供たちの参拝も多く見受けられ、賑やかな時が流れました。急な石段を登ってせっかくお参りいただき浮島の良い子たちや皆様方のため、来年度には町内会様と協議のうえ、何かしらお楽しみ企画を考えたいと思っております。

出雲通りが嶋満神社参道？

現在、旧市民病院の撤去工事が行われていますが、第二次大戦以前、この辺りには「浮島公園」がありました。市民病院西半分場所にはスタンドを備えた本格的グラウンド、嶋満神社の周りには公会堂や浮島温泉があり(奉賛会員、亀井様談)、舞鶴市民の憩いの場だったことがうかがわれます。

そして今は白糸中学校から大門通りまでの間しかない出雲通りが、この時代にはさらに北へ、当嶋満神社の小山のふもとまで伸びていました。

当時、当社の登り口は現在と違ってこの辺りにあったことから、出雲通りがさながら当社の参道であ

ったかのように思われます。そして九十年後の今、浮島集会所前の細長い通路にその面影を見ることが出来ます。



大正十二年発行新舞鶴市街地図を基にした図

(資料提供 奉賛会員、高田様)

寒山拾得(かんざんじつとく)

最近思うこと・・・

寒山と拾得、私はその名を知ったのは、いつも二人コンビで仲良く仕事をしておられる中年の土木技師の方をさして、知人が言った言葉からでした。「あの人のあ、寒山拾得みたいやな。」

寒山拾得、中国の伝説に出てくる風狂の詩人、二人はいつも子どものように仲良くしていて、それぞれ文殊菩薩と普賢菩薩の化身であったともいいます。

二人に関してはいろんな解釈があり、はっきり言うて私にはよくわからないことばかりですが、私はその音の心地よい響きと、いつも楽しげに仕事をしておられ、達観の境地とも見える前述のお二人の笑顔とを併せ、いつもうらやましく思っています。

仕事を楽しむ余裕、何事にもとらわれない自由な心、そして生涯を通じて信頼し合える友の存在。

古くから水墨画などの画題としても多く用いられて名画も多く、また森鷗外もこの二人を題材に同名の小説を書いている「寒山拾得」。興味のある方は是非、これらの作品に触れてみてください。

今回はこれにて終わりにさせていただきます。